◆八木健　選

　昨年、六月五日に、後藤比奈夫先生が老衰のため逝去された。百三歳だった。滑稽俳句協会設立当初から会員になってくださり、会報も十二年間ずっと購読してくださっていた。亡くなる一年前の夏に、お電話で退会のご連絡をいただいた。百二歳の高齢が理由とのことだったが、お声はお元気で、まだまだご活躍と思っていた。

　後藤先生は、大正六年、大阪生まれ。本名は日奈夫。大阪帝大（現・大阪大学）理学部を卒業後、高浜虚子の弟子だった父の後藤夜半に師事する。

　昭和五十一年、夜半の逝去により「諷詠」の主宰を引き継ぐ。平成二十四年に比奈夫の長男の立夫が主宰となり、自身は名誉主宰に就任する。ところが、平成二十八年に立夫が急逝したため、立夫の長女、和田華凜が主宰を継承する。

　句集『めんない千鳥』（平成十八年）で蛇笏賞、句集『白寿』（平成二十九年）で詩歌文学館賞を受賞している。

　平成二十五年八月放送の「八木健のＣＡＴＶ俳句」では、「今月の一句」のコーナーに直筆の色紙を提供してくださった。色紙は代表句の「東山回して鉾を回しけり」で、〝鉾が九十度回り終わったとき、左に見えていた東山が真正面に見え、力強い辻回しが東山に連動してできた作品〟とのご解説であった。三十五歳で俳句を始めたが、夜半からは十年遅いと言われ、その十年を埋めようと一ヶ月に二十四回も句会に出たエピソードもご紹介くださった。

　　白魚汲みたくさんの目を汲みにけり
　　遊び人風に紙雛出来上り
　　草笛を吹く口答したる口
　　しゃぼん玉吹き太陽の数増やす
　　蝶現れて芝生の広さ変りけり
　　竹を伐る音いま竹を離れたる
　　鶴の来るために大空あけて待つ
　　連翹に空のはきはきしてきたる

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

どう退治せむこの大き蓬餅

文旦を剥くに千人力を出す

顔用意この夏帽を被るには

◆荒井類　選

《謹悼・後藤比奈夫「諷詠」名誉主宰》

受けてみよ上寿の老の撒く豆ぞ　　　　後藤比奈夫

上寿とは〈人の寿命の長いこと。また、寿命を上・中・下の三段に分けた、最も上の段階で、百歳のこと。一説に百二十歳。〉。(『精選版　日本国語大辞典』)。要するに百歳の老人（自分のこと）の撒く節分の豆を「受けてみよ」といっているだけの句だが、それだけで何とはなしに滑稽味がただようから不思議だ。

蛞蝓（なめくじ）といふ字どこやら動き出す　　　　後藤比奈夫

これも同じく、何とはなしに滑稽味がただよっていて面白い。

以下は、角川「俳句」二〇二〇年八月号「特別座談会　発想の広げ方」（小澤實、仲寒蟬、和田華凜、司会・関悦史）、に載った後藤比奈夫の孫・和田華凜の語ったことである。ここに引用、ご紹介したい。

和田：楽しいみたいです。病院でも幾つか詠んでいます。ずっと酸素マスクをしていたのですが、先日子どもの日に病院から「句が詠めた」ということで電話がかかってきました。〈粽より酸素が好きで百三つ〉（笑）。どこまでも俳人だなと感心しながら、次の結社誌に載せるつもりでおりますけど。

実にすごい人生だと思う。百三歳になっても俳句を詠む力があるとは。そしてその句にどこか滑稽味があるとは。

《時空を超えた共演》

滝の上に水現れて落ちにけり　　　　後藤夜半

瀧の上に空の蒼さの蒐（あつま）り来　　　　後藤比奈夫

瀧の上に天へと続く道のあり　　　　和田華凜

一句目は人口に膾炙している。出展は『後藤夜半集』（一九八四年）。この句

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

は、昭和初期の「ホトトギス」巻頭に選ばれた作品だそうだ。

二句目の出展は一九七三年発行の後藤比奈夫の第一句集『初心』。（一九八一年　角川書店刊「増補　現代俳句大系」第一四巻所収）。

三句目は、本阿弥書店「俳壇」二〇二〇年九月号の「（後藤比奈夫）追悼特別作品十句　普賢菩薩」中の一句。

一句目の夜半の句を本歌取りしたのが、夜半の息子の比奈夫（二句目）。三句目は、比奈夫の孫（夜半の曾孫）による夜半と比奈夫を前提にした句。

これらは、時空を超えて詠まれた「滝の上に･･･」の共演（競演）である。個々の俳句が滑稽か否かということとは別に、こういうのもある種の滑稽と言えよう。読者諸賢も、この四代にわたる共演（競演）をご覧になって、面白いと思われるのではなかろうか。

（文中敬称略）

4

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。